平成 30 年度　第 64 回　近畿地区特別支援学校肢体不自由教育研究協議会実施要項

１．日　時：　平成 30 年 10 月 19 日（金）　9：30～16：20
２．会　場：　大阪府立藤井寺支援学校
　　〒583-0001　大阪府藤井寺市川北 2－5－23
　　TEL 072-973-1313　FAX 072-973-2853
　　Ｅメール：T-KoikeN@medu.pref.osaka.jp
３．主　催：　近畿地区特別支援学校肢体不自由教育研究会
４．後　援：　全国特別支援学校肢体不自由教育校長会　近畿地区特別支援学校肢体不自由教育校長会
　　大阪府教育委員会　和歌山県教育委員会　八尾市教育委員会　堺市教育委員会
　　藤井寺市教育委員会

５．日程及び内容

9:30 9:50　10:10 10:15　11:00 11:20　12:00　13:00　14:30　14:50　16:20

受付	本校の取組み	移動	公開授業	休憩移動	開会式・連絡	昼食見学	講演	休憩移動	分　科　会
玄関	体育館		各教室		体育館				各分科会会場

◎公開授業
　小学部・中学部・高等部
◎全体会　「開会式」
　　（1）開式のことば
　　（2）近畿地区特別支援学校肢体不自由教育研究会会長あいさつ
　　（3）来賓あいさつ
　　（4）来賓紹介
　　（5）助言者紹介
　　（6）会場校校長あいさつ
　　（7）閉式のことば
◎全体会　「講演」　講師　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
　　情報・支援部主任研究員　北川　貴章　氏
　　演題　「主体的、対話的で深い学びの実現をめざす授業づくりについて」
◎分科会　「７分科会」

６．研究主題
　　「主体的、対話的で深い学びの実現をめざす授業づくり」

７．趣旨
　新学習指導要領では「障害の重度・重複化、多様化への対応」「一人一人に応じた指導の充実」「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」「交流及び共同学習の推進」等の改善点があげられています。また、これまでの改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しに留まらず、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を見据えて授業改善を図る方向性が示されています。そこで、子どもたちの実態と課題を踏まえつつ、学ぶことの本質的な意義や子ども一人ひとりの持つ強みを改めて捉え直し、学びを後押しし、「主体的、対話的で深い学び」を実現できるよう、授業改善の方策を構想し実践を通して検証していきたいと考えます。
　本研究協議会では各校での実践報告から互いに学び、肢体不自由教育特別支援学校としての教育の充実・専門性の向上を図る機会となる事を期待します。

◎分科会　（担当校を提案者欄に入力しています）

分科会		テーマ	提案者	助言者	司会者	記録者
第一分科会	自立活動	重力軽減環境訓練システム（愛称：楽スタ）７年目の取組	大阪府立 岸和田支援学校 首席 北野　繋	大阪府立 交野支援学校 校長 西村誠三	大阪府立 岸和田支援学校 教諭 臼坂　駿	大阪府立 岸和田支援学校 教諭 小浦亜由里
第二分科会	交流教育	交流及び共同学習 ～小学部の交流教育について～	大阪府立 平野支援学校 教諭 中咲英人	和歌山県立 きのかわ支援学校 校長 神崎良子	大阪府立 平野支援学校 教諭 中嶋理絵	大阪府立 平野支援学校 教諭 辻上ゆかり
第三分科会	専門性の向上	子どものコミュニケーション能力を理解する観点と指導の方法	大阪府立 東大阪支援学校 教諭 菊野由紀	大阪府立 岸和田支援学校 校長 小川英夫	大阪府立 東大阪支援学校 教諭 三井勝規	大阪府立 東大阪支援学校 教諭 中村結衣
第四分科会	キャリア教育	社会的自立、就労をめざした力の育成 ～主体的・対話的・深い学びを図るための取り組み	大阪府立 茨木支援学校 教諭 金尾まさみ	国立特別支援 教育総合研究所 主任研究員 北川貴章	大阪府立 茨木支援学校 教諭 中田一夫	大阪府立 茨木支援学校 教諭 村井　学
第五分科会	水治学習	室内温水プールを活用した水治学習	和歌山県立 和歌山さくら支援学校 教諭 正木芳子	大阪府立 堺支援学校 校長 橋本輝幸	和歌山県立 和歌山さくら支援学校 教諭 山﨑和美	和歌山県立 和歌山さくら支援学校 教諭 渥美盛也
第六分科会	健康教育	「摂食指導」 肢体不自由を専門とする本校の摂食指導～学級担任を中心とした連携体制	和歌山県立 南紀支援学校 教諭 熊代由紀子	大阪府立 東大阪支援学校 校長 坂田定之	和歌山県立 南紀支援学校 教諭 稲田多美子	和歌山県立 南紀支援学校 教諭 丸山博士
第七分科会	ＩＣＴ	ＩＣＴの活用 ～実践事例から～	和歌山県立 紀伊コスモス支援学校 教諭 山﨑晴美 坂田昌寛	大阪府立 東住吉支援学校 校長 長尾浩一	和歌山県立 紀伊コスモス支援学校 教諭 溝端英二	和歌山県立 紀伊コスモス支援学校 教諭 岡村友紀

提案趣旨

第一分科会	自立活動	本校では平成 24 年から、新たな自立活動指導である重力軽減環境訓練システム（愛称：楽スタ）を導入した。これは部分免荷と不安定ながら制御された環境をつくることで、脳障害に伴う未熟な姿勢運動を支援する装置である。様々な工夫をすることで、約80％の児童生徒に使用することができた。今回、ヘッドコントロール支援システム、マイナス負荷の工夫、地域にむけた取組の 3 点について報告する。
第二分科会	交流教育	本校は、隣接小学校との年間を通した交流、近隣幼稚園との交流、児童の居住地域の小学校との居住地校交流に、長年取り組んできた。交流の機会を積極的にもつことで、児童と地域との好ましい人間関係を育てることをねらいとしている。本校の交流教育の取り組みと、本校児童の様子、交流校児童の様子、問題点や課題などについて話題提供したいと考えている。
第三分科会	専門性の向上	子どものコミュニケーションを考える際、表現方法や内容、伝わりやすさや伝わりにくさなど、表出面の様子を見て支援を考える場合が多いと考える。 今回はそれらの視点に加えて、コミュニケーションを広くとらえ、「受容→統合→表出」といった、「子どもと外界のかかわり」に注目して、コミュニケーション能力の理解を進めたい。さらにそこから見えてくる、具体的な支援・指導について、事例を紹介しながら考えていきたい。
第四分科会	キャリア教育	本校は、平成 31 年度創立 50 周年を迎える。標記のテーマで、卒業後の生活を見据えて、各学部で育みたい力を整理し、生活する意欲や力を育てるために、どのような教育的アプローチができるか、小・中・高等部の学部間の指導の継続性も踏まえて全職員が研究を進めてきた。その中間報告を行う。
第五分科会	水治学習	本校の施設には室内温水の支援プールがあり、５月から１１月は、体育の授業の一つとして水治学習を行っている。水治学習とは、水の性質を利用した様々な動作（浮く、泳ぐ等）を行って体を動かし、身体機能の維持・向上（呼吸や循環機能の改善など）や心理的安定（リラクセーション効果など）を高める学習活動である。肢体不自由の児童生徒にとって、天候に左右されることなく、定期的に水中で学習ができることは、筋緊張の緩和や主体的な動きを引き出すなどの効果があると考えられる。ここでは、水治学習の取組と実践を進めるにあたっての職員研修について報告する。
第六分科会	健康教育	肢体不自由教育を専門とする本校の摂食指導は、医療等の他職種と連携することで安全に行うことができている。本校では、教育の場において他職種が互いの専門性を認め合い理解しながら連携することの意義を確認し、児童生徒の生活がより豊かになるための指導を行う体制を整えた。障害の重い児童生徒を受け持つ学級担任が、主体的に指導方針を考えて取組を進めるための連携体制を提案する。
第七分科会	ＩＣＴ	本校は、平成 11 年度に肢体不自由教育部門から開校し、20 年目を迎える知肢併置校である。肢体不自由教育部門の児童生徒数は、全体の約１/５である。本校の肢体不自由教育では「見ること、言語理解、記憶、コミュニケーション等」への支援としてＩＣＴ機器を積極的に活用し、日々実践を行っている。今回は、実践事例に基づき、ＩＣＴ活用のための工夫について協議するとともに、情報交換も行う。